

プロフェッショナルの仕事

佐々木 嘉則

昨年の夏休みが終わろうとする頃だったと思う。村松賢一先生より拙宅にお電話をいただき、その秋を期して退官なさるといふ御決定をお伝えいただいた時、正直なところ最初に頭に浮かんだのは、「村松先生の授業を聴講させていただいておけばよかった！」という後悔の念であった。きちんとした話し方の訓練を受けないまま自己流で日本語教師を続けていたことに対して内心忸怩たるものがある我が身にとって、日常会話がそのまま生きた話し方講座の教材になる村松先生は文字通り「ブラウン管の向こう」の別世界の語りの技の達人でもあった。NHKでアナウンサーを訓練しておられたプロ中のプロである村松先生と同じ職場で働く機会を得たのは幸運という他はなく、「いずれ余裕ができれば聴講をお願いしよう」と一人で勝手に考えをめぐらせていたのであるが、それも今となっては、巡ってきた機会をその時に活かさなかった者の繰り言に過ぎまい…。

内心そんなことを考えながら拝聴した村松先生の退官記念講演は、内容・プレゼンの両面においてまさに「う〜む」とうならされるような裂帛の気迫あふれるプロフェッショナルのお仕事のクライマックスであった。それに先だって2002年に発行した『言語文化と日本語教育』増刊特集号に寄稿をお願いしたおりも、留学生センターの立ち上げなどでご多忙を極める中を快くお引き受けくださり、いまだところどころ荒削りなところが見え隠れする院生の習作集の最後をピシリと見事なプレゼンで締め括ってくださった。留学生センターに移られてからも日本語教育コースの運営に色々な形でご協力をお願いし、さらには御退官の後も院生の博士論文指導にご協力いただくなど、あれこれお力をお借りするばかりでこちらは全く先生のお役にたてないまま今日までできてしまったのが悔やまれる。

ともあれ、先生が昨年12月に設立された「スピーチコミュニケーション教育研究所」はいってみれば先生のライフワークの完成を目指す工房であると、ホームページより拝察している。今後益々のご活躍をお祈りするとともに、その成果の一端を拝見するのが今から楽しみでもある。